あさひView

2005
5·6
may./jun.

特集
愛・地球博のメッセージ

旭化成ファーマ株式会社

マリ・クリスティーヌが語る「異文化交流」

大阪万博以来35年ぶりとなる
日本での国際博覧会 愛・地球博が始まった。
その広報プロデューサーを務めるのが、
異文化コミュニケーターのマリ・クリスティーヌさん。
「自然の叡智」を縦糸に、
「地球大交流」を横糸に織りなされる
今回の万博の意義や見どころ、
そして異文化コミュニケーションの大切さを伺った。

photograph by Masato Seto

――紺のスーツに、グリーンのシフォンのスカーフを合わせ、颯爽と現れたマリ・クリスティーヌさん。愛・地球博のキャラクター、モリゾーとキッコロのバッジが襟元を飾る。世界の国々を迎える万博の広報プロデューサーという仕事は、海外の文化をよく知り、国際人として各国の人々とのコミュニケーションが得意なマリさんに、ぴったりの役どころだ。

私は外国で育ちましたが、海外では万博というのはエポックの始まりとして大きな意味を持ちます。最初の万博は1851年にイギリスで開かれましたが、産業革命が始まったイギリスの国力を見せつける大規模なもので、他の国々にも大きな夢と刺激をもたらしました。今回、愛・地球博に、広報プロデューサーとして関われたのは、とてもエキサイティングなことです。

でも、2002年にこの役に任命された頃は、会場となる名古屋でもほとんど盛り上がりがなく、本当に開催できるのかしら、と心配になるほどでした(笑)。それが途中から、少しずつマスコミで取り上げられることも増え、地元も万博ムードに染まってきたんです。最初は新幹線の中で、モリゾー、キッコロのバッジをつけた人を見ると、意識的に「こんにちは」と声をかけたりしましたが、今ではほとんどの人がバッジをつけていたりするので、挨拶しきれないほどです。

今回の万博には、2つの大きな意義があります。1つは、発展した日本の姿を世界に紹介すること。もう1つは、21世紀の人類のあるべき姿を考える場であるということです。

愛・地球博のメッセージ

大阪万博のときは、日本はようやく先進国の仲間入りをしたところで、国際化もこれから、という時代でした。ですから万博も「日本人が世界と接する場」でしたが、今度の愛・地球博は、世界の国々を迎え入れて、「日本を世界に見せる場」です。35年間で日本がそれだけ発展したということですね。

また、21世紀をリードしていくための博覧会としては、「自然の叡智」と「地球大交流」がテーマです。「自然のもつすばらしい仕組みと、いのちの力に感動し、世界各地での自然とのさまざまなつき合い方、知恵に学びながら、多彩な文化・文明の共存する地球社会を創ろう」ということです。

人類はこれまで、自覚のないままに自然環境を破壊してきました。自然には再生力が備わっていますが、人間がそれを妨げていたのです。これからは、自然修復を手助けするために最先端技術を使うなど、地球再生の努力をしていかなければなりません。そのためになにを考えていくべきかを日本として発信することが、愛・地球博の目的です。

そして、自然環境を破壊するもっとも大きな原因の1つが戦争です。ですから、自然環境を考える上でも、平和であることが重要。平和な世界をつくる基本は、文化の違いを認め、その多様性を受け入れることです。そのために異文化交流が必要なのです。今回の万博は、自然環境と人間環境という2つの局面から、21世紀のモデルをショーケースとして提示するものです。

――愛知県名古屋市郊外にある会場は、公式参加国や国際機関が出展する「グローバル・コモン」と呼ばれる6つのコモンと、会場をほぼ水平に一周できる空中回廊「グローバル・ループ」を基本骨格として構成されている。会場の設営や運営にも、環境への配慮がなされているという。

愛・地球博は「モノを残さない万博」です。サブテーマに循環型社会を掲げ、リデュース(ごみの減量)、リユース(再利用)、リサイクルの3Rを徹底し、環境に配慮した会場運営をしています。そして、

愛・地球博のメッセージ

各国の文化の違いを認め、その多様性を受け入れることで私たちの平和や自然環境は守られると思います。そのために異文化交流が必要なのです。

モノを残さない代わりに、環境に関するダイアログを残します。この万博には環境系のNGOやNPOが多数参加しており、彼らの手で毎日のようにフォーラムが行われています。会期中の半年間にわたり、環境問題の世界会議が開催されているようなものです。その記録をきちんと残していこうということです。

20世紀の万博は、広大な土地を切り開き、国の力や産業振興を示す開発型万博でした。でも、21世紀型万博は人類にとって大切なものを見据えるのが目的ですから、整地をせず、起伏のある自然の地形を生かした会場となっています。

そこで、訪れた人が移動しやすいように考案されたのが「グローバル・ループ」です。これには多数の意味が込められていて、1つはここを歩いていけば出展する121カ国のパビリオンを回れるため、「世界の国々を結ぶ」という意味。もう1つは、空中回廊なので「自然に土足で踏み込まない」、つまりは「地球を粗末にしない」という意味です。

次回開催される上海万博は、「better cities, better lives」がテーマで、開発型に近いものになるでしょうけれど、開発型であっても、地球環境に配慮した次世代都市づくりとして考えていくことが大切です。愛・地球博の理念を上海万博へバトンタッチすることができれば、国際社会への日本の貢献になるでしょう。

――愛・地球博の見どころはたくさんあるが、マリさんのおすすめはどこだろう。

まず、「遊びと参加ゾーン」の「グローイング・ビレッジ」です。ここのテーマは、自然を体感することによって、自然の生命に対する理解を深め、自然を愛する心を成長させていくこと。会場のある愛知県の名産品「八丁味噌」の味噌樽を利用して作った家が、ぽつん、ぽつんと置いてあるんです。中に入って風や水の音を聴いたり、プラネタリウムがあったり、子どもたちにも楽しんでもらえると思います。

それから、マンモスも大きな目玉です

万博で大観覧車を発明して大金持ちになった男

愛知万博でも長蛇の列をつくる人気のパビリオン「ワンダーホイール展・覧・車」（イラスト）。万博に限らず、大型の観覧車は各地で人気のスポットです。ところでこの大観覧車、もともとは1893年のシカゴ万博で初登場したもの。今から100年以上も前から存在していたのです。当時は、その発明者であるジョージ・W・G・フェリス技師の名前にちなんで「フェリス・ウィール」と呼ばれていました。

この観覧車、高さは約80メートルもあり、40人も乗れる列車の車両のような箱を36個、円周上に並べたもの。電動式で1周に要する時間は約10分で乗車料金は50セントだったそうです。さまざまなアトラクションの中でも「フェリス・ウィール」は群を抜く人気で、会期中145万人が体験し、フェリスは、設計に投じた私財40万ドルという金額を回収しても、なお余りある財をなし大金持ちになったとのこと。そしてアメリカでは今でも観覧車のことを「フェリス・ウィール」と呼びます。こうしてシカゴ万博以降、今日まで観覧車は万博に欠かせないアトラクションとなっていったのです。

ね。シベリアの永久凍土に眠っていたマンモスを発掘して、ガラス張りの冷凍庫に入れて展示してあるものです。私も見せてもらいましたけど、皮膚の感じも生々しくて、一万八千年前に生きていた物とは思えませんでした。

アメリカ館も楽しいですよ。アメリカ初の外交官であり、科学者としても有名なベンジャミン・フランクリンが、立体映像で復活して、アメリカの自然や科学技術の発展などを紹介するというパビリオンです。「月の石」も展示されますから、まだ見たことのない人は、ぜひどうぞ。

――マリさんの肩書きは「異文化コミュニケーター」。文化的背景の異なる人同士が理解しあう手伝いをするのが仕事だ。

「異文化コミュニケーター」を名乗るようになって、15年ぐらいたつでしょうか。某外国語スクールのCMでエイリアンが「異文化コミュニケーションやね」と言うより、私のほうが先なんです(笑)。

異文化というのはなにも外国人同士のことだけではなく、たとえば企業なら企業ごとに文化があり、官僚には官僚の世界があって、それぞれに異なっているわけです。その意味では、企業合併も国際結婚と同じなのね。お互いに、自分の価値観だけで判断していたのでは、いい関係が築けません。

私の父は一昨年に亡くなりましたがアメリカ人で、母は日本人。両親の夫婦ゲンカを聞いていても、カルチャーのギャップが原因であることが多かったんです。でも、私は両方の言い分が理解できる。それは、その背景を解読できるからです。私は日本、ドイツ、アメリカ、イラン、タイとさまざまな国で育ち、インターナショナルスクールの友人たちも皆、異なる文化を持った人たちでした。そんな中で、どうすれば背景の違う人同士が理解しあえるか、コミュニケーションのしかたが自然に身についたのだと思います。

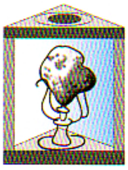
民主主義だとか、科学的な事実を持ち出しても、そういう価値観でものごとを考えていない人にとっては理解できません。自分のこととして考えることができ、心を打たれることではじめて、人は動くのです。だからこそ、相手の文化を知り、なにを大切にして生きているかを理解した上で、コミュニケーションすることが重要なのです。

文化による価値観の違いには、宗教が大きく影響します。たとえば、その宗教の自然観によって、人々の自然環境に対する考え方も違ってくるのです。以前、タンザニアの「ダイナマイト・フィッシング」が問題になったときも、そのことを痛感しました。ダイナマイトで魚を一網打尽にするこの漁法では、サンゴ礁を破壊し、網ならつかまらない稚魚まで殺してしまいます。自然保護団体がこれをやめさせるようタンザニア政府に働きかけ、政府は法律で規制しましたが、密漁が後を絶ちませんでした。ところが、イスラム教の聖職者が、「自然から摂取することをアッラーがお許しになるのは、必要なとき、必要な分だけである」と諭したところ、密猟者が激減したというのです。

――異なる文化を理解するためには、その国や地方を訪れ、自分の目で見て、自分の足で歩くことが大切、というマリさん。17歳でデビューして以来、講演や取材、国際ボランティアなどの仕事で国内外を訪れた。

海外は、数多くの国へ行っています。いろいろな文化を知って育ち、大人にな

月の石とマンモス



1970年に開催された大阪万博。なかでも来場者が「これを見ずして帰るわけにはいかない」と列をなして話題となったのは、アメリカ合衆国のパビリオンで展示された「月の石」でした。1969年11月19日、月面着陸に成功したアポロ12号は、着陸地点である"嵐の大洋"より月の石32.7キログラムを地球に持ち帰りました。その約30分の1にあたる930gが日本にやってきたのです。大人のこぶし大程度の「月の石」でしたが、当時の来場者にとっては、遙か彼方にあって見上げることしかできなかった未知なる星の一部が目の前に置かれていることに大きな衝撃を受けたようです。

そして今回の愛知万博の目玉は、シベリアの凍土から発掘した、約7～8000年前に絶滅した未知なる古代生物「ユカギルマンモス」の展示です。巨大な哺乳類であるマンモスは、氷河期に人類と共存していた生物で「地球の貴重な遺産」と呼ばれ、過去に各国の調査団によって発掘されましたが、未だ完全な姿を現した例がないとのこと。

このユカギルマンモスは万博会場のグローバル・ハウスの『マンモス・ラボ』という冷凍展示室内に、頭部、左前肢および骨格等その他の発見物をまとめて展示されます。冷凍展示室内はマイナス15度程度に保たれ、観客がガラス窓越しに展示物を見ることができるそうです。

大阪万博の「月の石」、そして愛知万博の「マンモス」。いつの時代も未だ目にしたことのないものを見るというのは心躍るものですね。

ってからもさまざまな国を見る機会に恵まれたことは、本当にラッキーでした。こうした私の経験を、今回の万博にも生かしたいと思っています。

外国だけでなく、日本国内でも北は利尻島から、南は竹富島まで、小さな村や集落へもほとんど行きました。旅先から旅先へ直行することもしばしばで、自宅へ帰るのは週に2、3回。洋服などの荷物を詰めなおして、またすぐに出発、といった毎日です。私は乗り物でもすぐに眠れる性質なので、移動がまったく苦になりません。もっとも、海外へ行くときは必ずマイ枕を持っていくんですよ。スーツケースの半分は枕なの(笑)。

健康情報番組に出演している関係もあって、健康についてはいろいろと教えていただいていますし、体には気をつけています。食事で実践しているのは、栄養学者の山田豊文先生の「まごはやさしい食事法」。"まごは（わ）やさしい"は、豆、ゴマ、ワカメ、野菜、魚、シイタケ、芋のことで、これらを主体とした食事をすれば、全種類のミネラルが摂れるのです。他にも、スポーツトレーナーのケビン山崎さんのところでウエイトリフティングをしたり、疲れたときには「ニンニク注射」を打ってもらったり。

万博開催中は名古屋でホテル住まいをしており、以前にも増して忙しい日々を送っていますが、好きな仕事をしていることが私の元気の素。いろいろな人と会い、コミュニケーションすることでパワーが出るのです。

P R O F I L E

マリ・クリスティーヌ

東京都生まれ。上智大学国際学部卒。東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻（平成6年）修士課程修了。現在も都市計画を研究中。一男一女あり。父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化科入学。在学中に芸能活動を開始。数カ国語に精通し、国際会議・式典・オーケストラなどの司会や、多数の講演をこなす。異文化コミュニケーター。2000年より国連ハビタット（人間居住計画）親善大使。「おもいッきりテレビ」（日本テレビ）、などのテレビ出演、国土審議会専門委員会委員をはじめとする各省庁等の委員会への参画のほか、アジアの女性と子どもネットワーク代表を務めるなど、数々の文化・ボランティア活動にも積極的に取り組んでいる。

BOOKS

万博がより楽しくなる4冊

「『万博』発明発見50の物語」

久島伸昭 著　講談社 1,680円（税込）

万博がきっかけとなって広まったものや有名になった人、始まったイベントなど、万博に由来して世に出た意外なものをトリビア風に紹介した一冊。

「心地よいわが家を求めて」

ヴィートルト・リプチンスキー 著
マリ・クリスティーヌ 訳

TBSブリタニカ 1,890円（税込）

オランダ、フランス、イギリス、アメリカ各国の伝統的な建築やインテリアなど、様式美の歴史を振り返りながら、西洋人の住まいの変遷や日常生活の詳細をわかりやすく解説しています。

「2005年日本国際博覧会 愛・地球博　公式ハンディブック」

財団法人2005年日本国際博覧会

発行 ぴあ 700円（税込）

出展しているパビリオンの解説をはじめ、会場内での移動手段、市民参加プログラム、イベントカレンダーなど、この一冊で愛知万博の全てがわかる便利なガイドブックです。

「マンモスはなぜ絶滅したか」

ヴェレシチャーギン 著　金光不二夫 訳

東海大学出版会 1,545円（税込）

愛知万博会場での展示が話題の古代生物マンモス。そのマンモスについて、絶滅の原因から化石のでき方まで、膨大な資料と緻密な研究によって書かれた、最良の解説書。